

中学生の「税についての作文」及び、小学生の「税に関する書道・ポスター」の募集事業について

次代を担う中学生及び児童の皆さんに、税を身近に感じ、自分たちと税がどのように関わっているかを正しく理解してもらう趣旨から、国税庁・全国納税貯蓄組合連合会・兵庫県納税貯蓄組合総連合会等が主体となり事業を実施しています。

近畿納税貯蓄組合 総連合会会長賞



湊小6年 蜂須賀 彩音



浦小5年 漣 彩芭

兵庫県納税貯蓄組合総連合会会長賞



広石小5年 濱田 小雪



神代小5年 村本 楓華



湊小6年 清水 准

淡路納税貯蓄組合 連合会会長賞



洲本第二小6年 秋山 眞子

公益社団法人淡路納税協会会長賞



洲本第二小6年 中谷 貫人

✿兵庫県納税貯蓄組合総連合会会長賞

六年 高垣 怜音
納税

洲本第三小6年
高垣 怜音

六年 松井 優香
納税

洲本第三小6年
松井 優香

六年 加世 田ひより
納税

鮎原小6年
加世田 ひより

六年 西田 妃良
納税

鮎原小6年
西田 妃良

五年 奥井 魁人
納税

津名東小5年
奥井 魁人

✿淡路納税貯蓄組合連合会会長賞

六年 西原 由菜
納税

洲本第一小6年
西原 由菜

六年 栢田 苺寧
税金

洲本第一小6年
栢田 苺寧

六年 静山 愛里夏
納税

洲本第一小6年
静山 愛里夏

六年 船瀬 未優花
税

洲本第二小6年
船瀬 未優花

六年 福島 綾香
納税

洲本第三小6年
福島 綾香

六年 奥野 朱李
国税

大野小6年
奥野 朱李

六年 魚崎 茉友子
納税

由良小6年
魚崎 茉友子

六年 石上 多恵
納税

安乎小6年
石上 多恵

六年 柏木 杏柚
納税

安乎小6年
柏木 杏柚

六年 藪田 夏生
納税

安乎小6年
藪田 夏生

六年 平田 そら
納税

都志小6年
平田 そら

六年 西村 光里
税金

堺小6年
西村 光里

五年 地主 梨桜
納税

塩田小5年
地主 梨桜

六年 家本 小夏
と生活
税金

塩田小6年
家本 小夏

六年 倉本 陽奈里
税金

学習小6年
倉本 陽奈里

公益社団法人
淡路納税協会会長賞

六年 村上叶花
納税

洲本第二小6年
村上 叶花

六年 中村優花
納税

洲本第三小6年
中村 優花

六年 徳田花音
納税

広石小6年
徳田 花音

六年 高浜能丸
税金

津名東小6年
高浜 能丸

六年 榎本百花
納税

八木小6年
榎本 百花

六年 飛田杏桃
納税

市小6年
飛田 杏桃

六年 入野叶夢
納税

神代小6年
入野 叶夢

六年 泊和奏
納税

福良小6年
泊 和奏

六年 前川舞衣
税金

北阿万小6年
前川 舞衣

六年 難波乃彩
納税

広田小6年
難波 乃彩

六年 田淵琳菜
納税

一宮小6年
田淵 琳菜

六年 松本莉苑
納税

一宮小6年
松本 莉苑

六年 太田咲倭子
納税

倭文小6年
太田 咲倭子

六年 東浦千夏
納税

松帆小6年
東浦 千夏

六年 谷池葵衣
税金

松帆小6年
谷池 葵衣

六年 原田朝陽
税金

松帆小6年
原田 朝陽

六年 杉浦衣咲
税金

湊小6年
杉浦 衣咲

六年 新崎結子
納税

辰美小6年
新崎 結子

六年 秦ゆめ
納税

榎列小6年
秦 ゆめ

六年 堀部和香奈
納税

八木小6年
堀部 和香奈

六年 山下陽輝
納税

神代小6年
山下 陽輝

六年 出口和奏
税金

三原志知小6年
出口 和奏

六年 谷中陽夏
申告確定

阿万小6年
谷中 陽夏

六年 奥田姫夏
税金

広田小6年
奥田 姫夏

六年 片山美月
税

広田小6年
片山 美月

入賞作品抜粋「あわじ島税の作品カレンダー（31年度版）」を配布します。希望者は淡路納税協会へ。

兵庫県納税貯蓄組合総連合会会長賞

社会と税

淡路市立一宮中学校 3年 山鼻ころろ



私には、納税に対する不信感があった。それは、度重なる地方議員による政務活動費問題や、国民から集めた税金の使い道が不透明だということからだった。他にも、貰ったお小

遣いでものを買おうとしても消費税がかかったり、両親の給料からも所得税として一部引かれたりと、周りの人達が文句を言うのを聞いていたこともあり、良いイメージは持ったことがなかった。しかし、それは何気ない祖母との会話によって払拭された。

1995年1月17日、淡路島北部を震源地に、阪神・淡路大震災という大規模な震災が起こった。広範囲に及ぶ倒壊や火災、ライフラインの断絶などの被災により、死者やけが人が多発した。祖母の話をしているとき、私の頭に「被災者のその後」のことがよぎった。被災地で生き残った人達の手当てや介護、カウンセリングに使うお金や、倒壊家屋や土砂崩れなどにより通行規制がかかった道を元通りにし、被災者が最低限の生活を送ることができるようにするお金が必要になっただろう。「おばあちゃん、被災したとき家を元通りにしようと思ったらお金めっちゃかかった？」すると祖母は、「そりゃそうやわ。でも、大体は貯金でまかなえ

たけど、税金に助けられたところもあったなあ。」と言った。私は驚いた。私にとってマイナスなイメージしかなかった税金に「助けられた」という受け身の言葉が使われたからだ。さらに、「役所の人や、逃げ道を確保できるように家の裏の道を掘りたいから、敷地を狭めてもいいかって訪問してきたこともあったなあ。」この言葉をきっかけに、私の中で税金が、遠い場所で不正に使用されているような存在だったものが、身近で国民のために使われているというイメージにがらりと変わった。

私には、納税に対する不信感があった。でもそれは、私の視野が狭いからであった。いい社会をつくるために集められた税金は、義務教育や子育て支援、介護を十分に受けることができるように国から私たち国民に還されている。つまり、国民一人一人が充実した生活を送るための納税義務であり、これは、国と私たちにとっての相互利益なのではないだろうか。そう考えると、税金は必要不可欠な存在だということがわかる。しかし、全ての税金が良い形で使用されている訳ではない。その後祖母と話をしても、「税金はいいことに使われなければ途端に意味の無いものになる」という話はでてきた。一人一人が税金に対して改めて考え、より良い暮らしを実現していかなければならない。そのために、私たちは社会と税の関係をよく理解し、これからも上手に付き合いをしていくべきなのである。

*この作文は、納税表彰式典で朗読披露されました。